



「性の多様性から『じぶん』について考える子どもたち。わたしたち大人は？」



にじいろ i-Ru (アイル) たなか いっぽ 田中 一步 さん こんどう たかこ 近藤 孝子 さん

今年度は講座1としてにじいろi-Ru (アイル) の田中一步さん、近藤孝子さんを講師に「性の多様性から『じぶん』について考える子どもたち。わたしたち大人は？」と題してご講演いただきました。にじいろi-Ru (アイル) は性の多様性について、子ども向けの講座を1,000講座ほど行ってきました。そこで見えてきた子どもたちの性に関する意識や偏見は、おとなたちに向けられていることをお話ししていただきました。

・にじいろi-Ru (アイル) の講座をきいて

田中さん、近藤さんのお話をきいて、わたしたちは生まれてきた身体の形、外性器の形で性別を決められていることに気がつきました。しかし、性のあり方は人それぞれであり、100人いたら100通りの性があります。マジョリティ側では「当たり前」「普通」とされる「割り当てられた性」を押しつけることで、生きにくさを感じる子どもたちがたくさんいることをにじいろi-Ru (アイル) がかわっている中の「7人の友だち」を通して学ぶことができました。

一方で、にじいろi-Ru (アイル) が行う子ども向け講座では同性を好きになったり、身体の性と自認する性が異なる人に対して「キッショ」という声や、ワンピースを着た女の子で男の子が好きなお子さんを「ちゃんとしている子」と発言する子どもがいたことを紹介していただきました。ここで考えないといけないのは「ちゃんとしている」「ちゃんとしていない」を決めているのは「先生、お父さん、お母さん」といったわたしたち「おとな」であるということです。

子どもたちは、生まれてきた瞬間から「異性愛はステキなんや」という情報を、空気のシャワーのように浴びながら大きくなっています。また、メディアだけでなく、学校においても先生たちがかける言葉がけ、授業の内容、行事の内容のなかにも性にかかわるすり込まれた情報はたくさんあります。

講演のなかで「性にかかわる生きにくさを抱える子どもと出会ったことがない」と話していた教員が「出会っていなかったのではなく、言ってもらえるような自分ではなかった」ことに気がつく話がありました。

わたしたち「おとな」のあり方が、様々な生きにくさを抱えさせられた子どもたちの声を押し殺していること、その場にいるのにいないものにしてきたことに気がつく必要があります。そして、すべての子どもたちの「こうしたい」「こうなりたい」が大切にされ、「じぶん、まる」といえる環境をつくるために、まずはわたしたち「おとな」が学び、変わる必要があるのではないかと考えることができました。

・参加者の声から

一步さんのお話を聞いて、「自分が男の子に間違われた時嬉しい」というエピソードを聞き、自分も同じ体験、思いをした事ある！と思いました。私は昔から女の子であるとは思っていましたが、スカートが嫌いでズボンばかり履いていました。男の子でありたいと強く思うこともあれば、突然可愛い服も着たい！と女の子でありたいと思うこともありました。

周りからは女の子なんだから…と言われることはなく、親にも特にこうしなさいと言われることなく好きなものを着てきました。中学生、高校生の頃は自分がどうありたいのか分からずにいました。成長していくにつれて、女性である意識が強くなってきて、でも時々男性でありたい！と思うことがおとなになった今でもあります。

このような研修を受ける度、まずは自分を知ることから…という話があるのですが、その話を聞いて考える度、自分は結局どういう性別なのか？どこに当てはまるのか？というのを考えていました。でも今日一步さんたちの話を聞いて、別に私はこのままでいいんだ、こういう性別なんだと、これでいいんだと何だかスッキリしました。